
Best Friend

春生向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B e s t F r i e n d

【Nコード】

N 2 9 2 1 E

【作者名】

春生向日葵

【あらすじ】

友達はいらない…そう思っていた愛結美。でも、七菜子と出会い、愛結美の心は開かれ…

友達はいらない

愛結美が七菜子と出会ったのは、高校1年の秋。

その頃の愛結美は、それほど友達と云う存在を重要視しておらず、友達は、いてもいなくてもいい…いたらいたで楽しいだろうけれど、面倒な事も多い…だったら別にいなくてもいいと思っていた。

友達は平気で裏切る。

友達は時に面倒な事を云って来る。

どうでもいい事で喧嘩したり、勘に触る事を云って来たり。

友達は、都合のいい時ばかり利用してくる。

だったら、一人でいた方が気が楽だ。

だから愛結美には、友達と云う存在はいなかった。

勿論、親友も。

それでも別に、寂しいなどと思った事がない。

昔、そこそこの仲の良かった友達に、『私達親友だよ』と云われて、急に鬱陶しくなった事があった。

親友と云われる程、仲良かった？

そんなに心を許したように見えた？

面倒臭い…

愛結美はうんざりして、その友達から離れた。

友達＝邪魔なだけ

親友＝面倒臭い

愛結美はずっと、そう思っていた。

確かに、以前は愛結美にも沢山友達はいた。

親友だってちゃんとしたし、誰から見ても、よく笑う普通の女の子だった。

でも、些細な事で言い争いになった時、愛結美はみんなから仲間外れにされた。

親友だと思っていた者さえ、愛結美を平気で裏切り、笑いながら離れて行った。

信じていたのに…

その悔しさと屈辱感は、愛結美を人間不審に追い込んだ。

もう誰も信じない…

誰もアテにしない…

もう二度と…

愛結美は、ずっとそう思って生きて来ていた。

七菜子と出会うまでは。

七菜子は、愛結美のクラスの恵里の友達だった。

愛結美と恵里は、特別仲が良かった訳ではない。

ただ、恵里の方から妙に馴れ馴れしく近付いてくるだけの関係。

ノートを見せてくれたの、一緒にお昼を食べようだの、一緒に帰ろうだの。

愛結美はそんな恵里を邪魔だとしか思ってなかったし、正直云って恵里の事は嫌いだったのだが、恵里はそんな愛結美の気持ちを、少しも感じてはいないようだった。

恵里がいると、こっそりとどこかへ身を隠す。

恵里に呼ばれても、大概気付かないフリをする。

それなのに、それでも恵里は、愛結美に近付いてくる。

愛結美は、恵里のその軽さがどうしても嫌だった。

ある日、帰宅途中の電車の中で、愛結美は誰かに突然抱きつかれた。ビックリして振り向くと、そこには悪戯っ子のような笑顔の恵里が

いた。

『なーにしてんだよ』

恵里は、愛結美が読んでいた本を乱暴に取り上げた。

『見て判らない？』

愛結美が冷たく突き放すように云つても、恵里には一切通じない。

愛結美が恵里回避の方法を考えていると、恵里が愛結美の手から取り上げた本を見て、『うわぁ！』と声をあげる者がいた。

恵里の後ろにいる、キリツとした目のロングヘアの子…

それが、七菜子だった。

『漫画じゃないんだ！字ばかり！よくこんなの読めるねえ！』

『こいつ本好きみたいでさあ、いっつもこう云うの読んでんだよ』

愛結美は『こいつ』と呼ばれた事に眉をひそめ、苛々して本を奪い返した。

『関係ないでしょ？』

愛結美はスタスタと歩き出し、隣の車両に移動したが、恵里は笑いながら後ろからついて来た。

『ねえねえ愛結美、私達今からお茶するんだけど、愛結美も来ない

？
』

恵里が甘えるように愛結美に顔を近付けて来る。

愛結美が溜め息をついて『行かない！』と云つても、恵里は一步も引かなかった。

『いいじゃん、たまには。行こうよお！珈琲の美味しい店だよ』

『私珈琲嫌い』

『紅茶の種類もいっぱいあるよ』

『別にいい』

『ジュースも全部絞り立てなんだよ』

『だから？』

既に愛結美の視線は、本の中にあつた。

今は本に集中しよう…

それが、今の愛結美に出来る恵里回避方法だった。

『愛結美ちゃん、ケーキは嫌い？』

今度は七菜子が口を開いた。

『嫌いじゃないけど…全部のケーキが好きな訳じゃないから』

『私も！モンブランとかスイートポテトとか、私の中ではケーキじゃないなあ…あとショートケーキも大嫌い！あれ生クリームの塊だもん！』

七菜子の言葉に、愛結美が振り返った。

好みが似てる…

そう思ったただけだったが。

『愛結美ちゃんはケーキ何が好き？』

『んー…チーズケーキかな…チョコも好きだけど』

愛結美は嫌な顔ひとつせず、素直に答えている。

自分の時とは違うその反応に、恵里は少し頬を膨らませた。

『じゃあ行こうよ！その店ケーキも美味しいよ』

七菜子が目を輝かせたが、愛結美の答えは『やめとく』だった。

やがて駅に着き、二人の方を見もせずに、愛結美は電車を降りた。

『じゃあねー』

恵里の叫ぶ声を無視して改札を出ると、愛結美は真っ直ぐ家に帰って行った。

恵里…何て邪魔臭い…

それに、あの妙なテンションは何？

自分は誰とでも友達…

でも内心では舌を出している。

恵里のあの笑顔…気持ちが悪い…

家に帰った愛結美は、恵里の態度に苛々していた。

着替えて時計を見ると、本屋でのバイトの時間が迫っている。

愛結美は慌てて支度をすると、自転車でバイト先に向かった。

本屋のバイトは愛結美にとって、一番好きな時間。

好きな本に囲まれてるし、接客も苦ではない。

必要以上にフレンドリーになる必要がない場所。

だから愛結美は、お客さんにも優しく出来た。

愛結美が、入荷した本と客が読み散らかした書籍の整理に追われている時、『すみません…』と声をかけられた。

振り向くと、遠慮がちに立っている七菜子がいた。

『あー！』

思わず二人の声が揃った。

『愛結美ちゃん！ここでバイトしてるんだ！』

親し気に呼ばれてるが、それは恵里が呼んでいたのを、七菜子が真似して呼んでいるだけに過ぎない。

愛結美はこの時まだ、七菜子の名前を知らなかった。

『えつと…』

『あ…私、七菜子。七菜子でいいよ。本探してるんだけど、見当たらず…』

『どんな本？』

『今、フランスの歴史の本探してるんだけど…』

七菜子は困ったようにキョロキョロしている。

愛結美は仕事の手を止めて、七菜子の話を聞いてあげた。

どうやら、先日授業で歴史の勉強をした際、好きな国の歴史を調べて、それをまとめてレポートにして来いと云う宿題が出されたようだ。

七菜子は何となくフランスを選んだが、どうも納得出来るような本もなく、図書館やインターネットで調べても、書いてある事がサッパリ判らない。

もつと判りやすい説明が欲しくて、あちこちの本屋を探し歩いているのだが、店員に聞いてもたいした収穫はなく、『もうどれでもいいや!』と辿り着いたのが、愛結美がバイトする本屋だったらしい。

『私、本であんまり読まないからよく判らないんだあ…』

『歴史の本だったら…』

愛結美は七菜子を連れて、一画の本棚に連れて行った。

『歴史の本ならこの棚にあるけど…例えばどんなのがいいの?』

『んと…』

七菜子は困ったような顔で、愛結美の指差す本棚を眺めている。

愛結美は七菜子のその様子から、『ちよつとこつちに…』と、別な本棚に連れて行った。

そこは、歴史書と云うよりも、歴史的な事柄や、聖書の内容や、世界に伝わる神話等の本が置かれた文学書のコーナーだった。

その中から、比較的判りやすい1冊の本を選び、棚から取ってあげた。

『これなら、フランスの歴史が判りやすく書いてあるよ…絵とか写真も多いし』

七菜子は本を受け取り、パラパラとめくって見た。

『あ、本当だ！すごい！』

分厚い本ではあるが、絵や写真が説明と共に載っていて、あまり本を読まない七菜子にも非常に判りやすい。

目を丸くして本を見ている七菜子を残し、愛結美は『じゃ…』とだけ云って仕事に戻った。

恵里の事は嫌いだが、七菜子は嫌な子ではないようだ…

賢そうで華やかな雰囲気の七菜子は、美しい羽根を広げる雄の孔雀を、愛結美に連想させた。

あの孔雀は、美しい羽根をいつも大きく広げて、その無数の目で見ろんな物を見ている…

そうやって、いろんな方向に目を向けながら、自分自身は知らん顔をしていて、いつの間にかしつかりと見定めている賢い孔雀…

そんな気がした。

恵里

翌朝、駅のホームに入った愛結美の目に、ベンチに座る七菜子が映った。

『あ、愛結美ちゃん！おはよう』

『…おはよう』

七菜子はすぐに愛結美に気付き、手を振っていた。

そしてそのまま手招きし、隣に座るように促したが、愛結美はただ、七菜子の前まで近付いただけで止まった。

『昨日ありがとね、あの本買って読んだら凄い面白くて、フランスの事も凄く判りやすかったよ』

『そうなんだ、よかったね』

『うん、知りたい事も全部載ってたし…愛結美ちゃんも、あの本読んだの？』

『元々本好きだし…本屋でバイトしていると、自然にいろんな本の情報が入って来て、読んでみたいって思うのがあったりするから』

『そうなんだあ…私、あんまり本で読まないんだけど、昨日の本読んだら、もつといういる読んでみようかなって思ったよ』

愛結美は初めて、七菜子に笑顔を向けた。

『愛結美ちゃんの笑顔って、何かいいね』

突然開心したように云った七菜子の言葉に、愛結美は少し恥ずかしくなった。

そんな事云われたのは、生まれて初めてだ。

『そんな事ないよ……』

『ずっと笑ってればいいのに…愛結美ちゃん、きつとモテるよ』

からかう為だとか、媚る為とか、そんないやらしさを一切感じない七菜子の真っ直ぐな言葉に、愛結美の頬がほんのりと赤くなった。

『やめようよ、そう云うの』

照れている愛結美を、七菜子は心から可愛いと思っていた。

でも、それを口に出してしまうと、愛結美の可愛さが消えてしまう。

そんな気がして、七菜子は敢えて口に出さず、一緒に笑っていたのだが、そこに恵里が現れた。

『七菜子！愛結美！おはよう！』

手を振りながらやって来た恵里の顔を見た途端、愛結美の顔から一瞬にして笑顔が消えたのを、七菜子は見逃さなかった。

『おはよう、恵里』

七菜子は恵里に手を振ったが、愛結美はフッと後ろを向き、そのまま静かに立ち去ってしまった。

七菜子是不愉快な子ではないようだ。

でも恵里は…

愛結美にとって、恵里は相変わらず邪魔な存在でしかない。

このまま教室までついて来られるのは困る。

愛結美は出来るだけ二人から離れ、丁度入って来た電車に乗った。

どんなに七菜子が話しかけても、愛結美は不思議と嫌な気はしない。

それは、七菜子も感じていた。

愛結美は、自分とだけは普通に話す。

愛結美が気難しいと云うのは、前に恵里から聞いて知っていた。

『私のクラスに、すごい気難しいけど、面白そうなのがいるんだよ！いつも誰とも話さないんだけど、話しかければ普通に話すんだ』

その時は普通に聞いていたが、愛結美の反応を見ると、恵里が話しかけても、必要最低限の答えしか返していない。

七菜子は薄々気付き始めていた。

恵里は、仲良くしようとしている訳ではない。

からかい半分で、愛結美に声をかけているだけ。

そして愛結美には、そんな恵里のいやらしさが、言葉を通して伝わっている。

愛結美は恵里を迷惑がっているのに、恵里はそんな事に気付いてない。

愛結美の嫌そうな反応を見る為だけに、恵里は毎日、愛結美にくっついてるように見えた。

七菜子と恵里は中学時代からの付き合いで、恵里のいい所も悪い所もよく知っている。

だからこそ、七菜子は恵里が許せなくなっただが、愛結美が自分で防御出来ている内は、自分は見ていようと思った。

高校2年になり、愛結美と恵里はクラスが離れ、七菜子は、愛結美の隣のクラスになった。

愛結美は、恵里の教室が少し遠くなった事に、心の底からホッとしていた。

だからだろうか…

愛結美と七菜子が一緒にいる姿を、恵里はよく見掛けるようになった。

でも、自分が近付くと、愛結美はスッとどこかに行ってしまう。

七菜子も別に、それを咎める様子もなく、当たり前のように愛結美を見送っている。

二人の間に、何か自分に関する事で話がされているのだろうか…

最初こそそんな風にも思ったが、最近では少しずつ腹が立って来ていた。

七菜子も何も云って来ないし、愛結美に至っては、もう会話すら成立しない。

何度か『最近仲良いね』と二人に云ってみたが、愛結美も七菜子も声を揃えて『そう？』と云うだけ。

いつの間にか、自分は七菜子と一緒にいる事さえ少なくなっている。

七菜子は元々、私の友達なのに…

恵里は疑心暗鬼になり、孤独感に襲われるようになって行った。

別に構うもんか…

友達は、七菜子や愛結美だけではない…

そう思っても、恵里の中に一度芽生えた嫉妬心は、なかなか消えない。

そしてそれは、とんでもない方向に向けられた。

『愛結美はレズだ』

恵里はそうみんなに振れ回った。

そんな噂が広まれば、七菜子は愛結美から離れ、また一緒にいられるようになる。

恵里はどこかでそう信じていた。

噂は恵里の予想以上の早さで広まり、それは七菜子や愛結美本人の耳にも入る事になった。

愛結美は普段、誰とも話さないのに、七菜子とだけは話している。

その事が、却って噂のスピードを早めていたようだ。

愛結美は七菜子への危険を感じたが、自分が七菜子を避けても、今まで通りに振る舞っていても、噂は決して消えないだろう。

ここは、何もせずにいる事が一番かもしれない。

愛結美は、特にこれと云ったアクションはせず、いつも通りに振る舞っていたが、愛結美が思ったより応えてないその態度が、恵里には面白くなかった。

愛結美を困らせる事が出来ると思ったのに、当の愛結美は相変わらず平気な顔をしている。

どちらかと云えば、七菜子の態度の方がおかしい。

愛結美のように、自分を避けているような気がする上、自分を見る目が冷たい。

恵里は気付いてなかった。

七菜子が愛結美の為にみんなから話を聞き、その結果、噂の発端が恵里だと気付いた事も、気の強い七菜子が、そんな恵里に対して憤慨し、愛結美の為に考えを巡らせている事も。

ある日の下校時間、七菜子は下駄箱で恵里を捕まえた。

『恵里！あんた何考えてるの？』

『何が？』

恵里はヘラヘラと笑いながら答えた。

『愛結美がレズだって、言い回ったんでしょ？』

『知らないよ！そんな噂があるのは知ってるけど…』

『当然でしょ？自分で立てた噂なんだから…』

七菜子の剣幕に、恵里は全身から血の気が引くのを感じ、青ざめて行く恵里を見て、七菜子は確信した。

『恵里…あんた最低！』

『関係ないってば！信じてよ！』

『恵里…自分がやったって認めて、ちゃんと愛結美に謝るなら、私は許してあげる…でも、それでもシラを切るなら、私はあんたを絶対に許さない』

恵里は、究極の選択を迫られた気分だった。

でも、悪いのは自分ではない…

飽くまで恵里はそう思っていた。

『知らないよ』

『恵里…あんた…最悪！』

そう罵った時、少しの間人がまばらだった下駄箱に、再び人が近づく声をした。

口をつぐんでしまった恵里に、怒りの治まらない七菜子は、いきなりキスをした。

何が起こったのか判らず、ただ硬直してしまっている恵里を尻目に、七菜子は人が目の前まで来た事を見計らって唇を離れた。

『何するのよ！友達だからって勘違いしないで！』

呆然としている恵里の体を突き飛ばし、七菜子は泣きながらその場を立ち去った。

偶然にも、そこには七菜子と同じクラスの生徒がいて、泣いている

七菜子を『どうしたの？何があつたの？』と捕まえて慰めていた。

『恵里が…いきなりキスして来たの…私そんなんじゃないのに…』

七菜子の証言通り、みんなの目には、恵里が無理矢理七菜子にキスしたように見えたようで、全員が冷ややかな視線を恵里に浴びせている。

恵里はやつと事情が飲み込めたのか、何か云おうと口を開いたが、
『二度と私に近付かないで！』と云う七菜子の叫びに消されてしまった。

そして、恵里が立てた『愛結美はレズだ』と云う噂は消え、代わりに翌日から別な噂が広まった。

『ずっと好きだった愛結美に相手にされなかった恵里は、仕返しに変な噂を立て、今度は七菜子を誘惑した。でもそれも断られて、拳げ句に自分がレズだとバレてしまった』

その新しい噂はあつと云う間に広がり、愛結美の耳にも入って、愛結美は思わず、声を上げて笑ってしまった。

同じクラスの生徒たちが、読んでいた本を床に落としてまで笑い転げている愛結美の所に集まり、初めて聞く愛結美の笑い声に、一緒に笑って笑い出していた。

『愛結美ちゃんの噂って、恵里が流したんだあ！』

『愛結美は恵里の気持ち知ってたの？』

『愛結美じゃなくて、あいつがレズだったんじゃない』

『そう云えば恵里つて、何かと愛結美ちゃんにまとわりついてたもんね』

『愛結美ちゃん散々だったね』

口々に勝手な事を云いながら、一緒に笑うクラスメイトの顔さえ、愛結美にはツボだった。

『愛結美笑いすぎ！大事な本落ちてるじゃん』

一人の生徒が、床に落ちている愛結美の本を笑いながら拾ってあげた。

『ありがとう…何かおかしくて…』

『判るけどね』

仲間に囲まれて笑う楽しさを、愛結美はこの時、全身で感じていた。今までは、近寄りがたいけど、無害だから放っておく…と云うのが、同級生が愛結美に対して抱いていた印象だったが、愛結美の笑い声を聞いて以来、それが一変した。

朝、愛結美が教室に入ると、『愛結美ちゃん、おはよう』と云われ、下校時には、『バイバイ愛結美ちゃん』と声をかけられる。

最初は不馴れな愛結美だったが、それも次第に慣れて行き、自分から声をかけるようになった。

勿論、『愛結美！帰ろう！』と隣の教室から迎えに来る七菜子もい

る。

愛結美は、七菜子のした事に気付いていたが、口に出すと笑ってしまいそうなので、云うのをやめた。

『愛結美、今日お茶して帰ろう…私最後体育だったから喉渇いちゃったよ』

『いいよ、いつもの喫茶店？』

『あそこ美味しいけど高いよねえ…駅前のモスでいいや』

気が付けば、愛結美は暫く本を読んでいない自分に気付いた。

友達は、裏切る者は裏切る

自分がそれを見極めていればいい…

いつしかそんな風に思うようになっていた自分にも、気が付いていた。

一方の恵里は、すっかり肩身が狭くなってしまい、学校にいる間は、どこにいても居心地悪そうにキョロキョロしていた。

何故自分がこんな立場になってしまったのかも、恵里には判っていなかった。

恵里の怒りは七菜子と愛結美に向けられていたが、恵里にはもう何も出来ない。

何をして、必ず自分が悪者になってしまう。

恵里はすっかり、意気消沈していた。

そんな恵里を気の毒にも思ったが、愛結美も七菜子も、恵里のした事を思うと、近づく気にはなれなかった。

許していない訳ではないが、許した訳でもない。

『恵里はきつと、自分が悪いなんて思ってない。あの子はそう云う子。だから、自分から謝ってくるまでは、関わらない方がいい』

愛結美より恵里をよく知っている七菜子の言葉には説得力があったが、愛結美は元々、恵里と関わるつもりは皆無だった。

だからずっと避けて来たのに、恵里にはそれすら気に入らなかったのだろう。

自分には友達が大勢いる…

自分はみんなの人気者…

恵里はきつと、それが自分の思い上がりだとさえ、気付いていない。

中身のない友情は、意図も簡単に壊れる。

大切にしないと、大切にはされない…

その事に恵里が気付く日は、まだまだ遠いような気が七菜子はしていた。

卒業

高校3年になると、愛結美と七菜子は同じクラスになった。

恵里とは、もう校舎さえ違う。

時々恵里を見掛ける事もあったが、恵里はこちらを睨むだけで通り過ぎる。

みんなの記憶には、まだあのレス事件が残っていた為、その態度が更に恵里を追い詰めて、『物凄く最低な奴』と云うレッテルを貼られていたが、その内、誰もが恵里の事は忘れて行き、平穏な日々になって行った。

本を沢山読んでいた愛結美には、話題の引き出しが沢山あり、頭もいい。

いつもは物静かだが、知識が豊富で比較的穏和な愛結美の周りには、常に人が集まっていた。

でも、その影響を一番受けていたのは、やはり七菜子だろう。

愛結美からいろいろな事を教わり、愛結美ほどではないが、時々は本を読むようになった。

愛結美の知識は広くて深く、普段は気にも留めないような事まで知っている。

逆に、七菜子は愛結美が今まで知らなかった楽しみを沢山知っていて、七菜子といると、愛結美は小さな子供に戻ったように、素直な

気持ちで笑っていた。

『愛結美、明るくなったね』

レズ事件の前から愛結美を知る者は、みんながそう云っていた。

学園祭にも修学旅行にも、常に愛結美と七菜子の笑顔があり、『二人のどっちかがいなくても気持ちが悪い』と云う者までいた。

3月、遂に卒業式

朝、妙に晴れがましい気持ちで学校へ行った愛結美は、生まれて初めて卒業式を寂しいと感じていた。

机に置かれている赤い造花のコサージュを胸に着け、一輪の造花のスイートピーを手にとつと、その寂しさが増して行くような気がした。

3年間通つたが、高校生らしかったのは、ほんの少しの間だろう。

それも、七菜子がいたから出来た事。

七菜子がいなければ、自分はずっと違った高校生活で、卒業式も、こんなに寂しくはならなかったかもしれない。

七菜子がくれたものは余りにも大きく、愛結美にとっては一番の宝物。

学園祭では、みんなと一緒に何かを成し遂げる喜びを知った。

修学旅行も卒業旅行も、笑顔で写真に映る自分がいる。

人に寄り添う幸せや、誰かと共にある楽しさ…

青春なんて言葉は、自分には関係のない、時代遅れな言葉だと思っていた。

七菜子がいたから、自分は笑えた。

そんな事が次々と愛結美の脳裏に浮かんだ。

『愛結美！』

思い出に浸っていた愛結美を、クラスメイトの一人が呼び、ただならぬ雰囲気です七菜子や他のクラスメイトが、愛結美を取り囲んだ。

『何？どうしたの？』

いぶかしげな愛結美の顔色を伺うように、七菜子が切り出した。

『恵里が来てるよ…愛結美と話したいみたい…』

『愛結美ちゃん、大丈夫？私が追い払って来ようか？』

『どうする？断る？』

恵里が来ている…

愛結美が教室の入り口を見ると、確かに恵里がいる。

愛結美はゆつくりと立ち上がり、恵里の待つ方に歩いた。

『何かされたら呼んでよ!?!』

誰かが後ろで囁いた。

恵里と会うのは、本当に久し振りだ。

3年間、ずっと避けて来た相手が、何故今頃?

恵里は愛結美が近付くと、脅えたような顔で少し後退ったが、愛結美が教室から出る事なく、恵里と一定の距離を保っていたので、複雑な顔をしていた。

『何?』

『愛結美ちゃん…私…』

いつになく口ごもる恵里に、愛結美を呼び寄せたままそこに止まっていたクラスメイトが、恵里を睨みつけながら低い声で云った。

『もうすぐ先生来るんだけど』

愛結美はこんな大勢に守られてる…

ずっと誰とも話さなかったのに…

いったいいつから…

そんな思いが、恵里の中に浮かんでいた。

『愛結美ちゃん…ごめん…』

両手をピッタリと体に着け、体を90度に曲げて、恵里が突然頭を下げた。

これには、愛結美だけでなく、そこにいた全員が驚いていた。

言葉を失い、呆然としている愛結美たちを残し、『それだけ』と云って恵里は去って行った。

『何だあれ…』

『何今の…』

口々にそう云っているのが聞こえた。

啞然としたまま席に戻った愛結美に、『愛結美ちゃん大丈夫？…いんな意味で…』と云った者がいた。

『恵里なりに考えた結果なのかもね』

七菜子が笑いたいのを我慢しているような顔で云った。

チャイムが鳴り、担任の教師が紺色のスーツ姿で入って来ると、いよいよ卒業式。

造花のスイートピーを持って体育館へ向かい、スイートピーを校長に渡して卒業証書を受け取った。

生徒が手渡したスイートピーは、校長の隣に置かれた硝子の花瓶の中に丁寧に入れられて行き、卒業証書が全員に渡された頃には、豪華な束になっていた。

卒業式が終わって教室へ戻ると、担任教師の最後のホームルームが始まり、解散になった。

愛結美と七菜子は歩きながら、今日の恵里の話や、今までの事をいろいろ話していたが、話ながら、愛結美の目が少しずつ潤んで来ている事に、七菜子は気付いていた。

愛結美の性格上、こんな街中では泣かないだろうと思っていたが、顔を歪ませて必死で我慢している姿を見た七菜子は、愛結美の腕を掴んで、人気のない小さな公園に連れて云った。

『何？どうしたの？』

突然の事に愛結美は面食らってしまったが、七菜子はただ微笑んで、両手を愛結美に差し出した。

『ここならいいでしょ？誰もいないし』

『七菜子？』

訳の判らない愛結美の髪を、七菜子は優しく撫でながら、そのままそっと抱き締めた。

『泣いてもいいんだよ…ずっと我慢してたもんね…泣きたいんなら、泣いちゃいなよ』

七菜子の言葉で、愛結美の目から、ずっと我慢していた涙が一気に溢れ出した。

微かに声を漏らしながら、七菜子にすがりついて泣いている背中を撫でながら、七菜子も涙が溢れて来ていた。

『意地っ張りだね、愛結美は…そんなに我慢しなくてもいいのにさ』

『七菜子お……』

『よしよし、泣いちゃいな…ずっと頑張ってたんだもんね…偉かったよ』

七菜子はまるで母親のように、愛結美の髪や背中を優しく撫でてあげた。

『七菜子…ありがとね…ありがと…』

『気にすんなよ、相棒』

七菜子は自分の涙をそっと拭いながら、愛結美を心ゆくまで泣かせておいた。

こんなに感情を出している愛結美を見るのは初めてだったが、愛結美が何も云わなくても、七菜子にはちゃんと判っていた。

愛結美は、何か理由があって自分の感情をずっと隠していた。

今愛結美が流している涙は、それが全部吹き出している涙でもある

のだらう。

どれ位長い事、心を閉ざしていたのかは判らないが、愛結美はいろんな事を、ずっと一人で我慢していた。

それを自分から云おうとするまでは、何も聞かないでおこう。

恵里はただの友達だったが、今胸で泣いている意地っ張りは、もう立派な親友だ。

だから、大切にしたい…

まだグスグスと鼻を鳴らしている愛結美をベンチに座らせると、七菜子は公園の入り口にある自動販売機から缶ジュースを買って来て渡した。

『…ありがとう』

『泣くと喉渴くんだよね…落ち着いた?』

『うん』

愛結美は涙を拭きながらジュースを飲んだ。

冷たく冷えたジュースが、渴いた喉を通って気持ちがいい。

『七菜子…』

『ん?』

『ありがとね…』

『いって事よ…泣きたい時は、泣きたいだけ泣けばいいんだよ』

『そうじゃなくて…それもだけど…』

愛結美は照れ隠しに鼻をかんだ。

『一緒にいてくれて、ありがとね…凄く楽しかったよ』

『私も、愛結美といれて面白かったよ』

ジュースを飲みながら、二人は暫く、泣きながら笑い合っていた。

会いたい

愛結美と七菜子はその後、別々の学校に進学した為、それっきり暫くは会えなかった。

メールをしたり電話で話したりはしたが、会いたいと思っても会えないまま時が過ぎ、『たまには会いたいね』と云うメールが、『いつか会えたらいいね』に変わっていた。

それぞれ恋人が出来たり、恋人と喧嘩したり、別れて、また新しい恋人が出来たりと、メールで報告はしていたし、たまには写真をメールに添付したりもしていたが、18歳の頃とは顔立ちも髪型も変わり、化粧もうまくなって行くお互いを見るにつれ、寂しさと恋しさが募って行った。

変わらないでいる事なんて有り得ないと判っていても、変わって行くお互いの写真に驚きを隠せない。

【少し太った？】

【この髪型どう？】

などとメールを交しても、寂しさは変わらない。

それは、二人が社会へ出てからも同じだった。

実家を出て、一人で暮らすようになって、時には一人でいるのが辛い時もある。

【会えなくても、ちゃんと傍にいるからね】

と慰め合っても、それは本当に表面上の慰めでしかない。

恋人に会えないよりも、親友に会えない事の方が、何倍も寂しいと、二人は感じていた。

24歳の冬。

愛結美の携帯に、七菜子からメールが来た。

【私、来年結婚するかも（＊　・　＊）妊娠はしてないけどね♪】

突然のこのめでたいニュースに、愛結美は久し振りにワクワクした。

【本当に！？おめでとー（＊＾　＾）／　＊　♪式はするの？】

【まだ判ないけど、すると思うよ♪絶対来てよね】

【勿論！】

七菜子が結婚…

愛結美は自分の事のように嬉しくなった。

七菜子がメールで送って来た、恋人とのツーショット写真を見て、愛結美は頬が綻んだ。

幸せそうに笑う七菜子と、七菜子の肩を抱いて、カメラを睨みつけているようなその恋人。

七菜子、綺麗になった…

同時に、今の自分の恋人が、自分との事をどれ程真剣に考えてくれているのかも不安になった。

【新居探しに行っただけど、どこも家賃高いねえ】

【今日ウエディングドレス見に行ったよ】

そんな七菜子からのメールを見るたびに、七菜子が羨ましくなった。

今度、彼に聞いてみようか…

【私も早く結婚したいなあ】

【彼氏に逆プロポーズしちゃえ！】

幸せ絶頂の七菜子には、恋人の愚痴を話す気にもなれない。

こんなに嬉しそうな七菜子の顔を、自分の恋人の話で曇らせたくない。

愛結美は、あまり結婚の事を考えてなさそうな恋人の話を、七菜子にするのはやめた。

でも、メールの度に、幸せ度が増えていく七菜子に触発されて、愛結美は遂に、恋人に将来の話を切り出してみた。

『俺も、その事は考えてたんだ』

『じゃあ…どう思ってる？』

『もう少し、時間をくれないか？』

恋人の聡史は、いつまでもはっきりしない態度のまま。

愛結美は正直、少し呆れて来ていた。

この人は、結婚する気はないのかもしれない…

それから少しの間、気が付くと七菜子からの連絡は途絶えていた。

結婚の準備で忙しいのかもしれない…

全てが決まって落ち着いたら、きっと何か云って来るだろう…

愛結美は、そう思っていた。

それからどれ位が経っただろう。

相変わらず、愛結美は結婚する意志の見えない聡史と、ズルズルと付き合っている。

結婚する意志がないからと云って、そう簡単に別れたくはない…

やっぱりまだ、それでも、聡史が好きだ…

悶々とした日々の中、仕事から帰宅してシャワーを浴び、そろそろ寝ようと思っていた時、愛結美の携帯が鳴った。

見ると、七菜子からの久し振りのメール。

そろそろ式場でも決まったか…

携帯を開き、メールを見た愛結美は愕然とした。

【婚約破棄。今日、彼氏と別れた】

『ええ！？』

愛結美は思わず声をあげ、すぐに七菜子に電話した。

『もしもし…愛結美？』

七菜子の声はかすれていて、明らかに泣いていた声だった。

『七菜子…大丈夫？何があったの？』

愛結美は訳も判らず、ただその衝撃に、胸がドキドキしていた。

『あいつ、最低な奴だったんだよ』

『どう云う事？』

『あいつ、他に女がいたみたいで…私との新居について選んだ部屋に、もうその女と住んでたんだよ』

『ええ！？』

何て男…

愛結美は相手の男に沸々と怒りを感じた。

『七菜子…一人で平気?』

『うん、大丈夫だよ』

七菜子は平静を装っていたが、愛結美には大丈夫ではない事が判っていた。

七菜子の家は、住所を聞いているから知っている。

愛結美は、電話を切ると着替えて外に出て、カーナビで住所を検索し、車を発信させた。

2時間ほど車を走らせた後、七菜子の住むマンションらしき建物に着いた。

愛結美は車を降りてマンションに入ると、郵便ポストに目を走らせた。

『あつた…305号室…入江』

愛結美はエレベーターに乗り、3階の七菜子の部屋に向かった。

ドアホーンを鳴らしても、七菜子はなかなか出て来ない。

こんな夜中に、どこかへ出掛けたのだろうか…

それとも、寝てしまっているのか…

まさか…七菜子…

愛結美は不安になり、もう一度ドアホーンを鳴らし、様子を見てみると、中でカチツと云う何かのスイッチの音が聞こえて、ゆっくりとドアが開いた。

『愛結美！』

『七菜子…大丈夫！？』

七菜子は愛結美の顔を見るなり、抱きついて来た。
愛結美は七菜子を抱き締め、何も云わずに静かに泣いている七菜子の背中を撫でていた。

『会いたかったよ愛結美…悔しいよお…』

『うん…うん…』

久し振りに感じる七菜子の匂いは、昔とあまり変わらない。

ただ、何だか少し小さくなっている気がして、七菜子が受けたショックの大きさが伝わった。

愛結美が恵里に変な噂を立てられた時、守ってくれたのは七菜子。

愛結美の為に、恵里に仕返しをしてくれた七菜子に、自分は何が出来るだろうか…。

泣きじゃくる七菜子を抱き締めながら、愛結美は考えていた。

部屋に入ると、七菜子らしい簡素な家具が並んでいる。

茶色いソファに、茶色い家具、青い布団のかかるベッド…フローリングにはクリーム色の絨毯が敷いてあり、部屋の色を重く感じさせない。

『七菜子…落ち着いた？』

ティッシュで涙を拭う七菜子に声をかけると、七菜子は小さく『うん』と頷いた。

それでもまだうつ向いて肩を震わせている七菜子を見ると、どんどん相手への怒りが込み上げて来る。

男は彼だけじゃない。

次にもっといい相手探せばいい。

そんなありきたりな言葉で慰めても、所詮は気休めにしかならないと、愛結美は知っていた。

何かもっと、七菜子の気が晴れる事はないか…

やっと話せる程落ち着いた七菜子に話を聞くと、愛結美は益々頭に血が上った。

七菜子の恋人は、七菜子にプロポーズしたものの、結納の日や結婚指輪、式場の予約について、かなり消極的だった。

話し合いたい事は沢山あるのに、『別に今すぐでなくても…』と言葉を濁す日々。

そんな恋人が熱心だったのは新居探しだけで、七菜子は取り敢えずは、真剣に考えてくれていると信じていた。

あの部屋は高いだの、あの家は狭いだのと云うのも、何れは増える家族の事を考えているのだと思っていた。

やっと気に入る部屋を見付けた時、二人はやっと、結婚に一方近付いた…はずだった。

恋人が、少し忙しくなるから会えなくなると七菜子に云ったのは、三ヶ月前。

七菜子は素直にそれを受け止めていた。

それなのに…

彼の声が聞きたくなって、彼の携帯に電話をすると、出たのは彼ではなかった。

とつさに友達の振りをした七菜子の耳に、聞き慣れない女の声がした。

『携帯忘れて買い物に行ったので、戻ったら伝えておきます』

当たり前のように話す、若い女の声…

それ以来、何度メールや電話をしても、彼は出ない。

そればかりか、完全に七菜子を着信拒否にした。

訳の判らない七菜子は、それでも全てに気付いていた。

彼はこのまま、フェードアウトするつもりだ…

そんな事はさせない…きつちり話をつけたいと思い、彼の家まで行ったのだが、そこは既に空き家だった。

七菜子は頭の中が真っ白になってしまったが、最後の頼みの綱は、彼の職場だ。

そこまでしたくはなかったが、逃げるなら追うしかない。

七菜子は彼の職場へ行き、彼が出て来るのを待っていると、彼は知らない女と仲良さそうに会社から出て来た。

最初は同僚かとも思ったが、密着して歩く二人の雰囲気、同僚だけの関係ではないと悟った。

声をかけるタイミングを逃したまま、彼が一人になったら捕まえようと思って尾行していたのだが、二人が向かったのは、七菜子と彼が住むはずだったマンションの部屋。

表札を見ると、彼の名前と一緒に、彼女のものらしき名前が書いてある。

許せない…

七菜子は翌日も彼の職場へ行き、彼が出て来るのを待った。

一人で出て来た彼を捕まえ、どう云うつもりなのか問いただすと、
『お前より大事な女が出来たから別れたい』とだけ云って、彼は去
って行った。

泣きながらそれを語る七菜子の辛そうな顔に、愛結美は決意した。

絶対に、許さない…

七菜子から彼が住む場所をさり気なく聞き出し、その日は七菜子の
部屋に泊まった。

許さない

愛結美と七菜子はその後、別々の学校に進学した為、それっきり暫くは会えなかった。

メールをしたり電話で話したりはしたが、会いたいと思っても会えないまま時が過ぎ、『たまには会いたいね』と云うメールが、『いつか会えたらいいね』に変わっていた。

それぞれ恋人が出来たり、恋人と喧嘩したり、別れて、また新しい恋人が出来たりと、メールで報告はしていたし、たまには写真をメールに添付したりもしていたが、18歳の頃とは顔立ちも髪型も変わり、化粧もうまくなって行くお互いを見るにつれ、寂しさと恋しさが募って行った。

変わらないでいる事なんて有り得ないと判っていても、変わって行くお互いの写真に驚きを隠せない。

【少し太った？】

【この髪型どう？】

などとメールを交しても、寂しさは変わらない。

それは、二人が社会へ出てからも同じだった。

実家を出て、一人で暮らすようになって、時には一人でいるのが辛い時もある。

【会えなくても、ちゃんと傍にいるからね】

と慰め合っても、それは本当に表面上の慰めでしかない。

恋人に会えないよりも、親友に会えない事の方が、何倍も寂しいと、二人は感じていた。

24歳の冬。

愛結美の携帯に、七菜子からメールが来た。

【私、来年結婚するかも（＊　・　＊）妊娠はしてないけどね♪】

突然のこのめでたいニュースに、愛結美は久し振りにワクワクした。

【本当に！？おめでとー（＊＾　＾）／　＊　♪式はするの？】

【まだ判ないけど、すると思うよ♪絶対来てよね】

【勿論！】

七菜子が結婚…

愛結美は自分の事のように嬉しくなった。

七菜子がメールで送って来た、恋人とのツーショット写真を見て、愛結美は頬が綻んだ。

幸せそうに笑う七菜子と、七菜子の肩を抱いて、カメラを睨みつけているようなその恋人。

七菜子、綺麗になった…

同時に、今の自分の恋人が、自分との事をどれ程真剣に考えてくれているのかも不安になった。

【新居探しに行っただけど、どこも家賃高いねえ】

【今日ウエディングドレス見に行ったよ】

そんな七菜子からのメールを見るたびに、七菜子が羨ましくなった。

今度、彼に聞いてみようか…

【私も早く結婚したいなあ】

【彼氏に逆プロポーズしちゃえ！】

幸せ絶頂の七菜子には、恋人の愚痴を話す気にもなれない。

こんなに嬉しそうな七菜子の顔を、自分の恋人の話で曇らせたくない。

愛結美は、あまり結婚の事を考えてなさそうな恋人の話を、七菜子にするのはやめた。

でも、メールの度に、幸せ度が増えていく七菜子に触発されて、愛結美は遂に、恋人に将来の話を切り出してみた。

『俺も、その事は考えてたんだ』

『じゃあ…どう思ってる？』

『もう少し、時間をくれないか？』

恋人の聡史は、いつまでもはっきりしない態度のまま。

愛結美は正直、少し呆れて来ていた。

この人は、結婚する気はないのかもしれない…

それから少しの間、気が付くと七菜子からの連絡は途絶えていた。

結婚の準備で忙しいのかもしれない…

全てが決まって落ち着いたら、きっと何か云って来るだろう…

愛結美は、そう思っていた。

それからどれ位が経っただろう。

相変わらず、愛結美は結婚する意志の見えない聡史と、ズルズルと付き合っている。

結婚する意志がないからと云って、そう簡単に別れたくはない…

やっぱりまだ、それでも、聡史が好きだ…

悶々とした日々の中、仕事から帰宅してシャワーを浴び、そろそろ寝ようと思っていた時、愛結美の携帯が鳴った。

見ると、七菜子からの久し振りのメール。

そろそろ式場でも決まったか…

携帯を開き、メールを見た愛結美は愕然とした。

【婚約破棄。今日、彼氏と別れた】

『ええ！？』

愛結美は思わず声をあげ、すぐに七菜子に電話した。

『もしもし…愛結美？』

七菜子の声はかすれていて、明らかに泣いていた声だった。

『七菜子…大丈夫？何があったの？』

愛結美は訳も判らず、ただその衝撃に、胸がドキドキしていた。

『あいつ、最低な奴だったんだよ』

『どう云う事？』

『あいつ、他に女がいたみたいで…私との新居について選んだ部屋に、もうその女と住んでたんだよ』

『ええ！？』

何て男…

愛結美は相手の男に沸々と怒りを感じた。

『七菜子…一人で平気?』

『うん、大丈夫だよ』

七菜子は平静を装っていたが、愛結美には大丈夫ではない事が判っていた。

七菜子の家は、住所を聞いているから知っている。

愛結美は、電話を切ると着替えて外に出て、カーナビで住所を検索し、車を発信させた。

2時間ほど車を走らせた後、七菜子の住むマンションらしき建物に着いた。

愛結美は車を降りてマンションに入ると、郵便ポストに目を走らせた。

『あつた…305号室…入江』

愛結美はエレベーターに乗り、3階の七菜子の部屋に向かった。

ドアホーンを鳴らしても、七菜子はなかなか出て来ない。

こんな夜中に、どこかへ出掛けたのだろうか…

それとも、寝てしまっているのか…

まさか…七菜子…

愛結美は不安になり、もう一度ドアホーンを鳴らし、様子を見てみると、中でカチツと云う何かのスイッチの音が聞こえて、ゆっくりとドアが開いた。

『愛結美！』

『七菜子…大丈夫！？』

七菜子は愛結美の顔を見るなり、抱きついて来た。
愛結美は七菜子を抱き締め、何も云わずに静かに泣いている七菜子の背中を撫でていた。

『会いたかったよ愛結美…悔しいよお…』

『うん…うん…』

久し振りに感じる七菜子の匂いは、昔とあまり変わらない。

ただ、何だか少し小さくなっている気がして、七菜子が受けたショックの大きさが伝わった。

愛結美が恵里に変な噂を立てられた時、守ってくれたのは七菜子。

愛結美の為に、恵里に仕返しをしてくれた七菜子に、自分は何が出来るだろうか…。

泣きじゃくる七菜子を抱き締めながら、愛結美は考えていた。

部屋に入ると、七菜子らしい簡素な家具が並んでいる。

茶色いソファに、茶色い家具、青い布団のかかるベッド…フローリングにはクリーム色の絨毯が敷いてあり、部屋の色を重く感じさせない。

『七菜子…落ち着いた?』

ティッシュで涙を拭う七菜子に声をかけると、七菜子は小さく『うん』と頷いた。

それでもまだうつ向いて肩を震わせている七菜子を見ると、どんどん相手への怒りが込み上げて来る。

男は彼だけじゃない。

次にもっといい相手探せばいい。

そんなありきたりな言葉で慰めても、所詮は気休めにしかならないと、愛結美は知っていた。

何かもっと、七菜子の気が晴れる事はないか…

やっと話せる程落ち着いた七菜子に話を聞くと、愛結美は益々頭に血が上った。

七菜子の恋人は、七菜子にプロポーズしたものの、結納の日や結婚指輪、式場の予約について、かなり消極的だった。

話し合いたい事は沢山あるのに、『別に今すぐでなくても…』と言葉を濁す日々。

そんな恋人が熱心だったのは新居探しだけで、七菜子は取り敢えずは、真剣に考えてくれていると信じていた。

あの部屋は高いだの、あの家は狭いだのと云うのも、何れは増える家族の事を考えているのだと思っていた。

やっと気に入る部屋を見付けた時、二人はやっと、結婚に一方近付いた…はずだった。

恋人が、少し忙しくなるから会えなくなると七菜子に云ったのは、三ヶ月前。

七菜子は素直にそれを受け止めていた。

それなのに…

彼の声が聞きたくなって、彼の携帯に電話をすると、出たのは彼ではなかった。

とつさに友達の振りをした七菜子の耳に、聞き慣れない女の声がした。

『携帯忘れて買い物に行ったので、戻ったら伝えておきます』

当たり前のように話す、若い女の声…

それ以来、何度メールや電話をしても、彼は出ない。

そればかりか、完全に七菜子を着信拒否にした。

訳の判らない七菜子は、それでも全てに気付いていた。

彼はこのまま、フェードアウトするつもりだ…

そんな事はさせない…きつちり話をつけたいと思い、彼の家まで行ったのだが、そこは既に空き家だった。

七菜子は頭の中が真っ白になってしまったが、最後の頼みの綱は、彼の職場だ。

そこまでしたくはなかったが、逃げるなら追うしかない。

七菜子は彼の職場へ行き、彼が出て来るのを待っていると、彼は知らない女と仲良さそうに会社から出て来た。

最初は同僚かとも思ったが、密着して歩く二人の雰囲気、同僚だけの関係ではないと悟った。

声をかけるタイミングを逃したまま、彼が一人になったら捕まえようと思って尾行していたのだが、二人が向かったのは、七菜子と彼が住むはずだったマンションの部屋。

表札を見ると、彼の名前と一緒に、彼女のものらしき名前が書いてある。

許せない…

七菜子は翌日も彼の職場へ行き、彼が出て来るのを待った。

一人で出て来た彼を捕まえ、どう云うつもりなのか問いただすと、
『お前より大事な女が出来たから別れたい』とだけ云って、彼は去
って行った。

泣きながらそれを語る七菜子の辛そうな顔に、愛結美は決意した。

絶対に、許さない…

七菜子から彼が住む場所をさり気なく聞き出し、その日は七菜子の
部屋に泊まった。

四

後日、服を返しに行くと、申し訳なさそうに出迎えた彼女が、愛結美を部屋に招き入れ、警察から聞いた話を始めた。

『この前、警察から聞いたんですけど…彼には、私の他に婚約者がいたそうなんです…』

『そうなんですか…』

愛結美は内心ドキドキしていた。

もしかしたら、彼女は何かに感付いたかもしれない。

『私、もしかしたらあなたがその彼女なんじゃって思ったんですけど…彼に聞いたら初対面だったって云うし…』

『じゃあ、彼とはまだ？』

『いいえ…別れました。この部屋も、来週引っ越します。初対面の人に乱暴するような人と、一緒にはいられません。彼は謝ってくれたけど、私はどうしても、女として彼を許す気にはなれないし』

『そうなんですか…』

『気にしないで下さいね…あなたのせいじゃありませんから…第一、あなたは被害者なんです。私、却って良かったと思ってます。婚約者の事も合わせて、結局そう云う人なんだって判りましたから』

愛結美は、本当の事を云いそうになって飲み込んだ。

『兎に角、私はもう彼に会うつもりはありません。あなたとも、きつともう会わないと思います。だから…本当にすみませんでした』

彼女は愛結美に土下座した。

『そんな…もういいんです…結局未遂だったんだし…それより、幸せになって下さいね』

愛結美は彼女の顔を上げさせて微笑んだ。

愛結美が彼女に別れを告げて部屋を出ると、いつの間にか七菜子からメールが入っていた。

【新聞見た！？あいつ、婦女暴行で逮捕されたんだって！】

【えー！何それー！】

【あいつそんな奴だったんだ…何か別れて良かったって感じ（〇。〇）泣いてたのが馬鹿みたい（笑）】

何はともあれ、七菜子が元気になった。

あの女性も、妙に清々しい顔をしていた。

この二人の反応が、愛結美の気持ちを随分軽くした。

でも、愛結美には、まだやらなければならぬ事があった。

その日、愛結美は彼に会いに警察へ行った。

『あんたが会いに来るなんてな…俺をこんな目に遭わせといて』

『ひとつ、云っておこうと思って』

愛結美は毅然とした態度で彼に向かった。

『私があなたを誘惑したって思ってるみたいだけど、私はあの時、やめてとしか云ってません』

『だから？』

『誤解してるみたいだけど、私はただ、道を聞きたかっただけ。それを、あなたが何故か勘違いした。勝手に車に乗って来たのもあなた。私は、何も云ってませんよ。だからやめてって、云ったでしょ？』

愛結美はそれだけ云うと帰って行った。

でも、その日から毎日彼に会いに行き、『あなたが勝手に誤解しただけ。だから私はやめてって云った』と云い続けた。

何を考えているか判らないが、いい加減うんざりだと云われても、愛結美が来ない日はなかった。

『あんた何考えてんだよ…おかしいんじゃないの？』
そう云われても尚、『あなたが勝手に勘違いしただけ。私はちゃんと、やめてって、云ったでしょ？』と云い続ける。

それは、彼を怯えさせるには充分だった。

『もう…やめてくれ…寝てても夢にあんたが出て来る…何考えてるか知らないけど…もう…判ったから』

愛結美は彼の次の反応を待った。

『…ごめんなさい…すみませんでした…本当に…本当にごめんなさい』

憔悴しきった彼の顔を見て、愛結美は漸く終わったと思った。

愛結美は、この為に毎日彼に会いに来ていた。

彼を弱らせ、戦意喪失させ、謝罪させる為に、毎日毎日、彼に同じ言葉を唱え続けていたのだ。

ここまですれば、彼はもう、何もしないだろう。

愛結美は彼にニッコリ笑うと、『女を本気にさせるのは、心から愛した時だけにして下さいね』とだけ云って帰った。

愛結美の後ろ姿を見送りながら、彼は心から『女って恐え…』と呟いた。

愛結美が彼の元へ通い続けていた間、七菜子には新しい恋人が出来ていた。

今度の恋人は、七菜子をちゃんと愛している。

愛結美はそう確信した。

残る問題は、自分の事。

結婚するのかもしれないのか、自分から聡史に迫っておいて、警察に通う事で精一杯になり、結局そのままになっている。

聡史には、忙しくて会えないと云ったきり、連絡もしていない。

もう、きっと駄目だろう…

愛結美は聡史との結婚を諦め、今は仕事に没頭しようと決めた。

【メールだけでもしてみなよ】

心配そうに七菜子がメールして来るが、もうそんな気も起きない。

愛結美は、なるようになればいいとさえ思っていた。

そんな日々の中、愛結美が仕事から帰ると、部屋に灯りが点いている。

消し忘れ？

最近疲れてたからかな…

溜め息をついて玄関の鍵を開けようとした時、ドアがゆっくり開いた。

何！？…誰がいる！

愛結美が驚いて後退りすると、顔を出したのは見慣れた男…恋人の
聡史だった。

『おかえり!』

『…何してるの!?』

『何だよ、その顔…来ちゃいなかったか?』

『そうじゃないけど…来るなら来るって云ってくれないと…強盗か
と思うじゃない!』

愛結美の心臓がドキドキしている。

恋人がいるからではなく、本気で強盗かと思ったから。

『帰って来るのが見えたから、驚かせようと思ってな』

『驚かせすぎよ…』

愛結美がフラフラと部屋に入ると、何やらいい匂いが漂っていた。

匂いの素は、台所。

『本当にどうしたの?』

『ちょっとな…もう少しだから、手洗って着替えて来いよ』

『お母さんみたいな事云わないでよ』

愛結美は笑いながら部屋着に着替え、洗面所で化粧を落として手を洗った。

『出来た出来た！あゆ、出来たぞ！』

『美味しそう…』

聡史は、愛結美の為に、愛結美の好物ばかりを作っていた。

海草サラダにペンのグラタン、野菜のコンソメスープと、炊きたての白いご飯…

『全部一人で作ったの？』

『他に誰がいるか？まずは食べよう』

二人は椅子に座り、食事を始めた。

どれもこれも、愛結美好みの味付けで、お世辞ではなく、本当に美味しかった。

片付けようと立ち上がった愛結美に、恋人は『後で俺がやるよ』と云って再び座らせた。

『今日何か変だよ…』

妙にソワソワしている恋人を見て、愛結美が笑った。

『俺この前、職場の女の子から手相教わったんだよ…見てやるから手出してみな』

愛結美はいぶかしげに、両手を差し出した。

『お前は頑固で頭が固くて、でも頭いいな…』

『ちょっと子供っぽくて…芯がしっかりしてる…あ、でも感情線がグチャグチャだな』

恋人は、勝手な事を云いながら、愛結美の掌を見ている。

『何それ』

聡史は、愛結美が笑い出しても尚、真剣に手相を見ていた。

『結婚線は…あ、これかあ…よかったな！もうすぐ結婚出来るぞ』

『結婚なんて…誰とよ』

『…俺とに決まってんじゃない』

愛結美はビックリしていた。

何故なら、いつの間にか左手の薬指に、ブリリアントカットのダイヤの指輪がはめられていたからだ。

『嘘…何これ！いつの間に！？』

目を丸くして指輪を見ている愛結美は、次の瞬間、ずっと聞きたかった言葉を聞く事が出来た。

『結婚しよう…会えなくて、凄く寂しかったよ』

『本当？…私でいいの？』

『俺は、愛結美がいい』

愛結美の目から、大粒の涙が溢れた。

もう駄目だと思っていたから、その喜びはやけに大きく、恋人への愛を再確認していた。

『愛結美…ずーっと、俺と一緒にいて下さい…』

恋人に手を握られ、愛結美はあまりムードのないプロポーズを、それでも幸せだと感じた。

『…よろしく願います』

その夜、恋人がシャワーを浴びている間に、愛結美は七菜子にメールした。

【今日、やっとプロポーズされた（*^^*）私、結婚します】

七菜子からの返信は早かった。

【うーそーー（□、；）！！マジー！？どんな男かお姉さんに見せなさい！】

愛結美は七菜子からのメールに吹き出した。

【今お風呂入ってるから無理】

【フシダラー!!】

七菜子とのメールに笑っていると、恋人がシャワーから出て来た。

不思議がる恋人に事情を話し、二人の写真を撮って、七菜子にメールで送ると「イチヤイチヤするな!」と云うメールが返って来た。

恋人からのリクエストで、【彼が七菜子の顔見たいって】と送ると、七菜子とはとんでもない写真を送って来た。

赤い口紅で、左の頬に『幸せに』、右の頬に『なるのだあ!』、額には大きなハートを描き、おまけに眉を太く塗り、ラメ付きの長いつけマツゲをして、ドジョウすくいのように、綿棒を下唇で支えて鼻に刺している。

これには愛結美も恋人も、お腹を抱えて笑ってしまった。

【七菜子…もしかして酔ってる?】

【ワイン1本空けちゃった(´・`・´)ゞエへ】

【呑み過ぎだよ!もう寝ちゃいな】

【そうする(笑) 愛結美も彼氏と子作りして寝ちゃえ】

このやりとりを、笑いながら見ていた恋人は、『いい友達だな』と云った。

結婚

愛結美の結婚準備が進む中、嬉しいニュースが舞い込んで来た。

【愛結美に追いついたよー！私も結婚しまあす♪（＃＾ー。）v】

七菜子からの突然のメールに、愛結美は声をあげて喜んだ。

こうなったら、二人のやる事はひとつ。

まず、お互いの婚約者同士を何度も引き合わせ、仲良くさせた。

婚約者たちは、最初こそ嫌がっていたが、それぞれいい友達になつて行つた。

愛結美と七菜子のペースで次々にあちこち連れて行かれ、それもまたいい思い出だと割り切つた男二人は、まるで10代の頃に戻つたように楽しそうな妻候補たちを、微笑ましく思っていた。

『あんな顔見た事なかったなあ……』

『一緒にいると、あいつら若返るな』

はしゃぐ二人を見ながら、そんな会話がされているとは、愛結美も七菜子も気付いていなかった。

そして、いよいよ結婚披露宴。

そこには、花嫁も花婿も二人ずついた。

その分お金もかかり、招待客も多かったが、合同結婚式と云う珍しいやり方を、皆楽しんでるようだった。

お色直しでは、七菜子は宝石のような深紅のドレス、愛結美は海のように真つ青なカクテルドレスを着て、それぞれが女神のように美しい。

でも、七菜子が慕っていた高校時代の教師がスピーチを始めると、二人の晴れやかな表情が一変した。

この教師は当時学年主任で、愛結美と七菜子を一番よく見ていた教師でもあった。

『七菜子さんは明るくて、いつも先生！先生！と、私の所に来ては、勉強の話よりも、恋の相談やら、友達の話やらをしていました。

愛結美さんは、いつも本を読んでいた印象が強く、私が薦めた本もちゃんと読んで感想を云ってくれたり、時には、ちよつと議論をしたりもしてましたね…』

二人の花嫁は、教師の話に頬をほんのりと赤く染めて微笑んでいた。

『お二人は、ずっと巡り会わないだろう環境にいたのに、いつの間にか、とても仲良くなっていたのを覚えています。私の目には、二人がどんどん変わって行く姿が、ちゃんと映っていましたよ…七菜子さんは、本を沢山読むようになって、自分の事や他人の事を、真剣に考えられるようになりましたね…愛結美さんは明るくなって、みんなに囲まれて生き生きと笑う姿が眩しかったのを覚えています』

愛結美と七菜子は、堪え切れない涙をそつと手で隠し、それを見た二人の花婿が、テーブルの下からスツとハンカチを差し出した。

『七菜子さん、愛結美さん、お二人の絆は、今でも途切れる事なく、続いていたんですね…一教師として、今そこにいるお二人の姿は、あなた方が高校生だった時よりも、輝いて見えます。卒業すると、どんなに仲の良い友達とも、それっきりになってしまうものですが、愛情と友情は、結局は同じ方向を向いています。互いを愛するように、あなた方を妻にしようと決めてくれたその人を、妻として、一人の女性として、大切に生きて下さい。友情を長続きさせると云う、素晴らしい事が出来たお二人ですから、必ず出来ると、先生は信じています。いつまでも、支え合い与え合つて、お幸せに』

教師のスピーチが終わると、花嫁たちは、目を真つ赤にさせて拍手していた。

司会者が、愛結美と七菜子が書いた両親への手紙を読みあげ、会場全体が涙に包まれての花束の贈呈。

涙を流しながら、花束を互いの両親に渡した愛結美と七菜子だったが、二人の脳裏には、これまでのお互いの事が渦巻いていた。

愛結美がいたから、強く生きられた…

七菜子がいたから、人を愛する事が出来た…

離れていても、気持ちは通じているような気がして、会いたかった…

愛結美は、『我慢しないで泣いてもいいんだよ』と、云ってくれた

卒業式の日を思い出し、七菜子は、婚約破棄になった日の夜に、知らせを聞いて突然訪ねて来て、何も云わずにずっと一緒にいてくれた日の事を思い出していた。

あの時七菜子がいてくれたから…

あの時愛結美がいてくれたから…

そんな気持ちが涙となって溢れ、それを止める事が困難になっている事に気付いていた二人は、花束贈呈の後の拍手の中、嘔咽を漏らしながらどちらからともなく、引き寄せられるようにしっかりと抱き合って号泣していた。

『七菜子…ありがとう…』

『愛結美…大好きだよ…』

そんな二人の姿が、より一層みんなの涙を誘い、新郎たちでさえ、黙って目と鼻を赤くさせていた。

披露宴が終わった二人は、控室で互いのブーケを交換し、それぞれ二次会に出掛けた。

七菜子は、愛結美のブーケを箱に入れ、寝室に暫く飾っていたし、愛結美も、七菜子のブーケを箱に入れたまま、何年も玄関に飾っていた。

ブーケを見る度に、お互いを思い出す。

意識の中で、それがただのインテリアになってしまっても、その中

には親友の涙と笑顔が染み込んでいる。

交換したブーケは、夫婦が永遠の愛を誓った結婚指輪のように、二人にとって、永遠の友情を暗黙の内に誓い合った大切な宝物。

二人の絆の証だった。

ずっと一緒

結婚の翌年、七菜子が妊娠し、男の子を出産した。

その次の年も七菜子は妊娠、そして愛結美も、初めての子供を授かった。

七菜子は二人目も男の子だったが、愛結美には女の子が生まれた。

『許嫁にしちやおうか…』

この二人の企みは、お互いの旦那によって却下された。

2年後、愛結美はもう一人女の子を生み、家族でお祝いに駆け付けた七菜子が、『合コン状態だね』と笑ったのを見て、七菜子の旦那が『また許嫁にしようとか云うなよ…』と、七菜子の口を塞いだ。

子育ての忙しさから、なかなか会う事は出来ないと思われていたが、家族が増えて家の中が狭くなったと感じた愛結美たちが、七菜子たちの家からそれ程遠くはない場所に住み始めた為、子供たちは、幼馴染みとして共に育って行った。

『やっぱり許嫁にしたいなあ…』

愛結美と七菜子は、旦那に黙って、そんな話を再びするようになった。

ただ、どの組み合わせで許嫁にするか、それが問題。

4人の子供たちは、みんなそれぞれ仲が良い。

悩んだ結果出したのは、七菜子の長男と、愛結美の長女と云う組み合わせだった。

でも、旦那たちにすぐにバレてしまい、再度却下された挙げ句、結婚くらい自由にさせてやれ！』と叱られてしまった。

それから5年。

高校時代の同窓会が開かれる事になった。

ホテルのパーティー会場を貸し切ったの、賑やかな同窓会。

懐かしい顔触れが揃う中、七菜子の姿もそこにはあつた。

でも、七菜子といつも一緒にいた愛結美の姿がどこにもない。

同級生の一人が、七菜子に近寄って来た。

『今日、伊藤さんは？』

『伊藤？…あ、愛結美？』

愛結美の旧姓を云われて、七菜子は一瞬悩んでしまった。

『そうそう！愛結美ちゃん！今は…長谷部か』

同級生の問掛けに、七菜子は唇を噛み締め、まだ誰も知らない、今の愛結美のいる場所を、ポツリポツリと話出した。

その場にいた同級生たちは、七菜子の話に驚きを隠せない。

愛結美は、半年前にこの世を去ってしまっていた。

子育てが忙しく、なかなか会う事が出来なかったが、いつもメールや電話では話していた。

久し振りに会った時、愛結美は顔色が悪く、咳をしていたので、七菜子は心配になったが、愛結美はただ『大丈夫』と云っていた。

『うちの旦那煙草吸うし、風邪もひいたみたいでね…』

顔色と咳以外は、別に変わった様子もなく、本人も至って元気そうだったが、それは本人さえ判らない異変だった。

買い物中、突然倒れた愛結美は救急車で病院に運ばれ、漸く全てが明るみになったが、その時は既に手遅れ。

愛結美は、末期の癌に侵されていた。

愛結美がまだ若いと云う事が災いし、その転移は非常に早く、抗癌剤治療も間に合わない。

医者は愛結美にモルヒネを投与し、日々激しくなる苦痛を和らげる事しか出来なかった。

『毎日一緒にいるのに…何で俺が気付いてあげられなかったんだ…何で俺は愛結美の前で煙草なんて…俺のせいだ…』

愛結美の癌発覚以降、聡史は毎日自分を責めていた。

『そんなの私だってそうだよ…顔色悪いって判ってたのに…大丈夫だよって云うのそのまま信じちゃって…私がもっと、ちゃんと愛結美に云ってれば…』

『七菜子ちゃん…あいつには、秘密にしててやってくれ…お願いだから…』

『でも…愛結美は判ってるかもしれない…』

『それでもいい…怖がらせないであげてくれ…あいつは…凄く怖がりだから…すぐに治るって信じてるから…』

七菜子は、泣きながら頭を下げる聡史を見て、とても辛くなった。

そんなある日、お見舞いに行った七菜子の目に、ベッドに横たわってぼんやりと空を見ている愛結美が映った。

『愛結美…』

愛結美は、七菜子の方を見もしない。

七菜子がベッドの脇の椅子に座ると、ゆっくりと振り向いた愛結美が微笑んだ。

その笑顔を見た七菜子は、愛結美との別れが、もうすぐそこまで来ていると感じた。

『七菜子…ありがとう…ごめんね…』

七菜子は、聡史に頭を下げられてから、愛結美の前では明るく笑ってしようと決めていた。

でも、優しい笑顔でゆっくりと口を動かす愛結美を見ると、もう涙を堪える事が出来なくなってしまった。

『愛結美…どこへも行かないで…ずっと一緒にいてよ…』

『七菜子…ごめんね…』

『愛結美…やだよ…やだよ…絶対やだ!』

七菜子は愛結美の手を握り、声を上げて泣いてしまった。

『七菜子…大好きだよ…』

『愛結美…やだ…やだあ…行かないで…行っちゃダメ…』

愛結美は、すっかり細くなった腕で七菜子の手を弱々しく握り、一筋の涙を流した。

『七菜子…どうもありがとう…私を変えてくれて…いつも一緒にいてくれて…』

『愛結美…愛結美…そんな事云わないで…もう喋らなくていいから…』

『七菜子…そんなに泣くと…喉渴いちゃうよ…』

七菜子はもう、完全に取り乱してしまっていた。

愛結美がいなくなる…

私の中から…

『愛結美…やだ！やだ！行かないで！やだあ！』

『七菜子…ごめんね…もう…一緒にいられそうにないよ…一人で…大丈夫だよね？』

『大丈夫じゃないよ！愛結美がいなきゃ駄目だよ！もっと一緒にいてよお！』

『大丈夫…七菜子は…大丈夫だよ…』

『愛結美…愛結美…やだあ…お願い…』

『七菜子…あの人に伝えて…私は…世界で一番、幸せだったって…七菜子がいて…聡史がいて…子供たちがいて…みんながいたから…私は凄く、幸せだったんだよ…』

愛結美は、満たされたような笑顔を七菜子に向けた。

愛結美…私こそ、幸せだったんだよ…

七菜子は、今までにない程の涙を流して泣いた。

その夜、泣き疲れて眠る七菜子の所に、聡史から電話がかかってきた。

『愛結美が危篤なんだ…』

七菜子は家族を起こし、急いで病院に向かった。

もう間に合わないかもしれない…

病院に到着した七菜子は、愛結美の病室に走った。

愛結美…待ってて…逝かないで…

廊下を曲がると、病室の前には、愛結美と聡史の両親が来ていた。

『七菜子ちゃん！早く愛結美のところに…』

愛結美の母親に急かされ、七菜子が病室に入ると、酸素マスクをつけた愛結美がいた。

愛結美の傍には、力なく床に膝をついて座りこんでいる聡史。

『愛結美…七菜子ちゃんが来たぞ…待ってたんだろ？』

聡史は泣きながら、七菜子を愛結美の傍らに導いた。

『愛結美…』

愛結美に、もう意識はないようだ…

七菜子は愛結美の手を握り、命の炎が消えそうな愛結美を見つめた。

『愛結美…判る？…七菜子だよ…戻って来て…』

七菜子はまだ、諦めきれない。

『愛結美…戻って来て…お願い…』

あれほど泣いて、もう出ないと思われた涙が、七菜子の目から次々に溢れては頬を流れる。

『逝かないで…戻って…愛結美…一人にしないで！』

七菜子が愛結美の手を握ったまま呼び掛けていると、意識がないはずの愛結美が、そっと七菜子の手を握り返して来た。

『愛結美…愛結美！戻って！そのまま！』

七菜子は必死で呼び掛けた。

聡史は、もう意志のなくなっているはずの妻が、七菜子の手を握っている事に驚いていた。

『愛結美…七菜子ちゃんが判るのか？』

それは、愛結美が最後に見せた、ほんの一瞬の奇跡だった。

七菜子は感じていた。

愛結美の手が、徐々に冷たくなってきている…

『愛結美！愛結美！いや！逝かないで！逝っちゃだ！逝かないで！起きて！起きてえ！』

七菜子のその叫びは、廊下にいた家族に、愛結美の最期を知らせた。

『いや！いや！愛結美！やだああああ！！』

愛結美の腕や肩を掴んで抱き起こそうとする七菜子を、医師と看護師たちがベッドから離し、愛結美の臨終を伝えた。

『愛結美――！いやだあああ！』

七菜子の悲鳴が、廊下に木霊した。

愛結美に抱きついて泣いている七菜子に、愛結美の母親がそつと囁いた。

『七菜子ちゃん、ありがとう…全部、七菜子ちゃんのお陰よ…』

愛結美の葬儀の日、七菜子は愛結美の両親から、ひとつの指輪を受け取った。

それは、愛結美と七菜子が初めて二人だけで行った旅行で、二人で色違いで買った珊瑚の指輪だった。

七菜子は赤い珊瑚、愛結美は淡いピンクの珊瑚を選んだ。

『愛結美がね、これは七菜子ちゃんとお揃いだからって、凄く大切にしてたの。あの子だと思って、持ってたあげてくれる？』

『はい…』

愛結美、ずっと一緒だよね…

七菜子は、薄いブラウンの革チェーンを買い、愛結美の指輪をネックレスにして、肌身離さず身につける事にした。

それから半年後の同窓会で、七菜子から愛結美の死を知らされた同級生たちは、愛結美が見ていてもいいように、同窓会を明るく盛り上げて、いない事を後悔させてやろうと決めた。

最後にみんなで集合写真を撮った際、暗黙の了解で、みんなは七菜子の隣を一人分空けた。

いつも愛結美がいた場所は、七菜子の左。

そこは、愛結美の指定席だった。

七菜子がいるから、愛結美がいた。

愛結美がいたから、七菜子がいた。

愛結美…

いつか私がそっちへ行ったら、また、一緒に笑おうね…

それまでは、まだまだ長くかかるけど、愛結美と一緒に生きるから…

愛結美が出来なかった事、私、いっぱいするからね…

愛結美が見れなかったものも、いっぱい見るからね…

あとで、残らず聞かせてあげる。

だから、見ててね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2921e/>

Best Friend

2010年10月11日04時57分発行